

飛行機に乗ったドン・キホーテ

今月より、東京のドンキホーテこと清水さんのエッセイの連載がはじまります。

このたび「旅たび東洋」に連載寄稿をさせていただくことになりました。私は現役時代、聖教新聞の特派員として10年間、中南米を回ってまいりました。メキシコも何回か訪れ、グアタハラからペラクルス、ユカタン半島、モンテレイ等、地方にも足を伸ばしました。定年後には南スペインのマラガ大学に留学、スペインの文化について学んできましたが、ラテン・アメリカの文化の源流はスペインであることを改めて実感したところです。

以下は「東京のドン・キホーテ」を自称する筆者が、ロシナンテに代わり飛行機に乗って各地を訪ね遭遇した出来事や文化比較についてのエッセイです。



① 時間に対する感覚の違い

五つの「あ」の原則を心にとどめ

4年前、スペインに留学し最初に直面したのは時間についての感覚の違いでした。アパートに電話を設置する際のことです。設置は日本の場合のようにわざわざ電話局に行かなくても電話による申し込みができました。住所、氏名、パスポートNo. 取引銀行名・支店名、口座番号を知らせるだけでよかったです。私はさっそく携帯電話から申し込み、取り付け日の約束もしました。そのとき担当者は2日後の午後6時にアパートに来ると返答したのです。

指定の日、私はどこにも出かけずに家でずっと待っていました。ところが、6時を過ぎて7時を過ぎてもやってきません。念のため終業時間の8時まで待ってみましたが現れません。しかも何の連絡もないのです。局では私の携帯電話の番号を知っている筈でした。

翌日、再度、局に電話をしました。電話口に出た担当者は「バレ、バレ、明日6時ごろには行くからね」と。さてその翌日です。どうなったと思います?なんと、また現れなかったのです。

その次の日の朝、私は少々怒りや脅し言葉を使って、再び催促の電話を入れました。その結果か、ようやく正午近くに担当者がやってきて、設置は何とか順調に済んだのです。でも、約束どおり来られなかった事に対する、納得のいくような説明はありませんでした。

私はここでお世話になったスペインの悪口を言おうとしているわけではありません。遭遇した事実をそのまま綴っただけです。たぶん、たまたま当たった担当者が特殊な状況下にあったか、あるいはこれは極端で例外的なケースだったのかもしれませんが。

かつて特派員として中南米を回っていた時にも、同じような体験をしたことが何回もありました。そこで、私はスペイン語圏で最も使われる挨拶言葉「アスタ・マニャーナ」について、自分なりの新たな解釈を作り上げたのです。

「アスタ・マニャーナ」とはご存知のように、スペイン語で「明日まで」または「明日また」といった意味です。私はそれをもじって「五つの『あの原則』」を編み出したのです。

『あせらず』『あわてず』『あくせくせず』『あてにせず』、けれども決して『あきらめず』

——この「五つの『あの原則』」を心にとどめている限り、仮に思うようにことが運ばなくてもイライラしないですむ、ということなのです。



「アスタ・マニャーナ」とはすることを先に延ばしているのであって、決して「やりません」とは言っていない。その意味では、相手も自分も傷つけない優雅な言葉なのです。そんなアスタ・マニャーナのリズムで動いている国に、せかせかした日本式リズムで飛び込めば、時間の歯車がかみ合わず、ギアがかけたり、空回りするのが当然の成り行きかもしれないわけです。

かつて私が訪れていたラテン・アメリカでは、勤務の終了時間がくると、仮に仕事が途中でであっても、皆サッと引き上げていました。残った仕事は「アスタ・マニャーナ」でよいのです。それよりも自分の生活を楽しむのが大切なのです。

ところが、日本からの出張社員また駐在員は、そうはいきません。本社との交信に「時差」の問題もありますが、夜遅くまで明かりのついているビルの事務所といえば、たいがい日系企業との相場でした。そうした人々のご苦労で本社も日本の経済も発展してきたとも言えるでしょう。



時間が主人か人間が主人か

その一方で、スペイン語圏の国の人々の生き方を見ながら、経済的な効率だけを考慮して、時間に正確で、時間に支配されているような国内の日本人の生き方も、時代に合わせ見直してみることも必要かもしれないと思ったところです。「時は金なり」との諺を拡大し解釈していけば、その生き方は「時間が主人で人間がその従者」とも言うことができるかもしれません。

電話設置のケースは例外としても、ときどき、スペインやラテン・アメリカの、時間にややルーズな生き方のほうがユーモアがあり、生きていく上の穏やかさがあるように思うこともあります。つまり、ここでは「人間が主人で時間が従者」になっているのです。メキシコの読者の皆さんはどう思われますか?

筆者: 清水 武 ドン・キホーテを生きる「自愉人」
自称: Don Quijote de Tokio (東京のドン・キホーテ)
略歴

1941年長野県に生まれる。早稲田大学卒業。
NHK学園高校の教諭として勤務後、聖教新聞社に入社、同紙特派員としてパナマに常駐、北南米およびヨーロッパの32カ国を訪問する。

2001年に定年退職後、福生市のセントラル・テキサス・カレッジで学び、02年にはスペインのマラガ大学に1年間留学。現在、名作の舞台を訪ねてをライフワークに、NPOで在日外国人の支援活動にもあたっている。現在の仕事: 旅行作家 トラベルパートナー 海外留学アドバイザー 英会話講師・通訳 スペイン語会話講師・通訳 NPOシニア大衆登録講師

所属グループ
日本ペンクラブ 日本アビリティーズ協会 NPO立川多文化共生センター 昭島市シルバー人材センター 昭島市市民大学 昭島市つつじが丘シニアクラブ 同パソコンサークル 稲門会カラオケサークル レインボーテニスクラブ 男の料理教室「食楽会」
著書

「飛行機に乗ったドン・キホーテ」「『定年留学』してみませんか? ——60歳からのアクティブライフのすゝめ——」「ラテン・アメリカに暮らして」



「理想と正義に向かって突進するオレのことを皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね……」

——ドン・キホーテのつぶやきから——

